



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30~13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 63-1151

会長：越野 民男 幹事：浅田 豊久

情報委員長：清水 忠

1975・10月30日 第52号

乳児死亡1 のかげに

詩人 安積 得也氏



乳児死亡1、交通事故死3、倒産件数2——こういった乾いた数字を、日々の新聞や統計は、砂のように無感動に報じている。

読む者も又、自分にかゝわりのない茶飯事として見すごしている。しかし、その1という数字は、愛児に死なれた母親には、逝けるわが児の姿と見えるだろう。

輪禍に父を失った子には、痛ましい事故現場の血と写るだろう。夫の職を奪われた妻には、職安を徘徊する落魄の後姿と映ずるだろう。

それは度しがたい人間の愚かさというべきかも知れない。

しかし、その悲しみや涙には、他人の不幸を自分の不幸と考え、自れの幸せを人の幸せと見ようとするねがいがある。尠くともそこには、人間1個の存在を、地球よりも重いかけがえのないものと見る人間尊重の思想がある。

人間に対する虚心の愛情——その愛こそ素漠たる人間不毛の現代が最も求めているものである。

私たちはこの至純の愛を持つてうではないか。“超我の奉仕”を目指すロータリアンがその先頭に立つことは当然といわねばならない。

—金沢北RC2周年記念特別講演より— (文責 清水 忠)



卯辰山碑林散歩 (24)

——孤庵馬伝の墓——

観音院は碑石の宝庫である。

その中に苔むした孤庵馬伝墓があってひとときわ往昔を偲ばせている。

馬伝は観音院の支坊愛染院の僧で、生没の年月ははっきりしないが文政年間と推定される。

孤庵と称し俳諧をたのしんだ。

碑面には、

“死なばこ、西に東に月と花、  
が刻まれている。

## 私の職業奉仕

松本 智

私の職業奉仕と謂うと何か気恥かしい気がいたします。とても書く気になれませんが、敢てご批判を頂きましょう。

「あの……お客さまがどうしてもこれを受け取れって、何度もお断りしても駄目ですし、あまり強くお断りすると気分を害されるようで……」「しかしチップは頂いては駄目だよ、どうしてもといわれるのなら、有がたく頂戴し、おみやげでも買ってお返しして、残金は仏間のお賽銭箱へ喜捨して貰えれば結構ですが……」というわけで、創業以来ノーチップ制を実施して皆さまに喜んで貰っています。毎日毎日が沢山のお客さまですから、中には粗相をする子供、病気になる人、忘れもの、落しもの、怪我の手当などさまざまなことがあり、親切にお世話をして差上げると、とても喜ばれて、前記のようなことになるわけで……、しかし大衆を相手に薄利多売をモットーにしている私共が、いくら感謝されたからといって、お気持ちだけで充分で、心付を頂くというのは折角の親切が無くなるような気がしてなりません。こうして貯まったお賽銭は、集めて社会福祉事業に有効に役立てようと、創業以来積立ててあり、例えばあのバングラデシュの飢餓救済などに寄附したりしたのを差引いても数百万円も貯っています。

これは全くの私見で恐縮ですが、自分の仕事に誇りと愛情と責任を持つのはプロとして至極あたりまえのことで、そうするのが難しく、そうしない者が多いからといって、当然なことをするのが職業奉仕であるという説にはどうしても賛成出来ないのです。職業奉仕というのは自己の職業と



立場を生かして社会に積極的に奉仕することだと思いたい。だからこそ難かしいので、たとえそれが金銭であろうとも、行為であろうとも、そのことが社会の為になることなら敢えて売名行為でも許すぐらいの度量があってほしい。自分の仕事だけを一生懸命にする人ばかりではとても今の世の中はよくなるのではないのでしょうか。そんなわけで私共の会社では、小さなことですが対社会的に積極的に協力出来る場合は、許される範囲で絶えず協力させて貰っています。

もちろんまだまだ数も少ないのですが、一般からのお申し入れがあったり、恵まれない環境の人達が、私共の施設を利用される場合は、いつでも相談させて頂いております。また施設の子供達を招待したり、施設慰問に芸能人に協力して貰って派遣する場合があります。儲けるのも損するのでも商売ですから、商売を離れて出費するのも、喜んで貰えることならよいではないか、と思っております。ところで、私共の事業は子供を喜ばすというか、子供達に好かれるというか、そういう性格があります。幼児の手をひいた若いパパやママはきっと、「お父さんも子供の頃、ここえ来たんだよ……」と教えておられることでしょう。私はその時子供達が、「パパやママの遊びに来たところってこんなに良いとこだったの」と思われる施設でありたいものと努めています。誰にも判らない苦勞を通して、私共は自分を生かす道を絶えず考えています。それは決して職業奉仕というものではなく、職業に生きる者としての最低限のライセンスとでもいえるかも知れません。

## 随想 金沢の望湖台で

安積 得也氏

研究集会の一行は金沢市のミニバスに乗せられた。兼六公園から浅野川をこえて卯辰山公園に向った。徳田秋声文学碑を通り過ぎると、日本海の展望が大きくひらけた。

「望湖台」と大書した標示が立っている。

湖とは河北潟に相違ないのだが、天候の加減でどうも判然としない。眼にうつるのは日本海そのものである。大きな秋の景観だ。

「いっそのこと、望湖台の湖とは、日本海を意味するということにしたらどうでしょう」

と私は説明役の金沢市役所文書係長氏に言った。

「それは面白いですね」

と、笑いながらの応答が返ってきた。

私は本気でそのことを考えた。



いま世界は不況で悩んでいる。折しも「視界ゼロ」といわれる国会は揉めて、機能がストップしている。

地球上を見わたすと、15才以下の「世界児童数」約10億のうち、8億が飢えと栄養失調と、病気と貧困と無教育状態に悩んでいるというのではないか。開発途上の国々では、義務教育年令まで生き延びる児童数が、4人中の1人に過ぎぬ、というのではないか。またある地域では、小学校に入学し得ても、これを満足に修業するまで生き延びられる子供は、更にその十分の一にとどまるというのではないか。これらの国連発表の統計をただ数字として見ていてよいだろうか。

私は思った。日本海を湖水と見たてる望湖台の広い眼で、地球全体を見ようと思った。

また私は、金沢という地名の起源について先刻聴かされたばかりの話を考えて。500年の昔、藤五郎という農夫が砂金を沢の水で洗った。その「金洗いの沢」が金沢となったのだという。500年前の金沢は、貧しい寒村に過ぎなかったのである。

それなら、今から500年後の金沢は、日本は、世界は、と考へても空想税はかかるまい。広い眼とともに、永い眼で、地球と人類の明日を考えたいと思った。



北陸の宿で、スーツケースの中の小冊子を開いた。折にふれて愛誦する川合信水著「大人と小人」である。自己の小人ぶりを恥じながら、次の語録が心にきた。「大人は時勢を知り、時勢に先だち、時勢を改め、時勢を作る。小人は時勢を知らず、時勢に後れ、時勢に逆い、或は時勢に漂はさる。」

「大人の世界に対するや、自国を愛すると共に、他国を愛し、自国の特長を重んずると共に、他国の特長を敬ひ、自他の文化を交流し、相互の福利を増進し、他国をして自国の良友、益友とならしむ。小人の世界に対するや、自国を偏重して、他国を軽視するに非れば、他国を妄拝(もうはい)して、自国を忘却し、軽浮盲動、他国の蔑視する所、利用する所と為る。」

